

# この英国人

出口 泰生

もう古いことになるかも知れないが、寿岳文章氏の書かれた『この英国人』という小冊子があった。その最初の頁のところに、

一体にイギリスには変人が多いと言われる。わが国ならば立派に精神異常者として世間から別扱いにされるやうな人が、かの国ではさほど怪しまれもせず、勝手なことをして一生を暮らす。(原文のまま)

と書いておられる。寿岳氏はその書物で、十九世紀の歴史的人物ウィリアム・コベットの小伝を語っておられるのであるが、その同じ題名を先生から拝借して、ぼくは自分の印象のなかにある「この英国人」を書いてみたい。

The British Museum (以下 B・M・と略す) は、ご存知のとおり、単なる博物館ではなくて、国立図書館を併設しているのが、他には見られない特長であろう。そこには高いドームのある広大な Reading Room と、George III の寄贈になる蔵書をおさめた King's Gallery の図書だけを見せる North Library とか、定期刊行物の読書室とか、あるいは Oriental の読書室、文豪などの原稿や書翰などを見せる Manuscript の部屋など大小いくつかの図書館がある。それらは単なる図書館というよりは、歴史的文献研究所といった方がぴったりとする。ことに North Library の reader には、世界各国からの著名な学者がおおぜい見えている。M. S. の部屋もそうだ。

かれらはみな実に精力的に仕事をしているように見える。福原麟太郎氏が Thomas Gray の M. S. の研究を、Henry Bergen 氏となさったのも、この M. S. の部屋である。氏はどこかで、日に 2・3 時間しかやらなかったと書いておられるが、毎日コンスタントに 2、3 時間原稿にむかい合って暮らすのも、決して楽な仕事ではない。それでもたいていの常連は、朝 9 時から終日かじりついている。そうしてカードとかノートに書き込んだ、何 10 センチにも及ぶ研究の成果を、机のうえにうず高く積み上げている学者も少くない。それはおそらく長い時間の、たゆまざる努力の積み重ねであろう。まるでその成果を誇示し合うかのように、来る日も来る日も、同じ席に陣どって、さらにカードを積み上げてゆく。

North Library はむしろ陰気な部屋である。昼なお小暗らく、周囲の書棚は古い書物の山、机のうえはこれまた国宝的な書物の山、それにうず高く積まれた研究ノートとカード。そんななかで長い時間をすごしていると、ぼくのようななまけ者には、ときどき耐えられなくなってくる。だから 10 時と 3 時のティ・タイムが待ち遠しい。わずかの時間、顔なじみの学者たちと、ティをたのしみながらさまざまの会話ははずむ。それでもまだ疲れが残っているとき、ぼくは Duveen Gallery にあるギリシャのパルテノンから Sir Elgin が持ち帰ったあのすばらしい彫刻のまえに立って、しばらく時間を忘れることにする。Manuscript Saloon で、York 寺院や Canterbury 寺院などにつたわる古い手書きの聖書や、そのミニアチュールを見るのも愉しみだ。知らぬ間に時間がたってゆくし、ここの Saloon は、絶えず展示物が変わるから、なかなか見倦むことがない。

丸いドームの主図書館の Reading Room は、明るい気持ちのい

い部屋である。夏目漱石が毎日座った机や椅子は、いまでも当時のままである。机のうへは、濃いブルーの皮ばりで、皮は書棚にも張ってある。書物をいためないための細かい配慮からである。

毎日 B. M. の Library に通っていると、いつの間にか何人かの顔なじみができる。それにここは、入館証が必要で守衛が毎日それを調べるのであるが、これも6人ばかりいる守衛に顔を憶えられると、毎朝「モーニン」と会釈するだけで、「モーニン・サー」といってフリーで通してくれるようになる。この B. M. の常連のひとりに、I 君という30歳そこそこの青年がいた。この青年の顔には実は見憶えがある。1963年にすこしここに通ったときによく見た顔だ。それでいろいろ話しているうち、彼はもう8年間毎日ここに通っていると聞いた。一度郊外の彼の邸宅でお茶をごちそうになったこともある。I 君には定職はない。ときどき詩を書いて雑誌に投稿する程度である。しかし彼はこつこつルネサンス美術史を独りで研究している。もう長い年月になるから、やがてそれは大きな結実をもたらすだろう。かれは自分の仕事をひけらかすことはしない。毎日ごく日常的に、悠々として、たいてい同じ席を陣どって、読書と書きものをしている。かれの家は立派だが、生活そのものは地味で、洋服や靴もかなりくたびれている。学校はロンドン大学を出て、経済学を専攻したらしいが、美術史に自分で転向した。いわばアマチュアの学者である。E. Barker の *The Character of England* という書物に、英国人の性格のひとつにアマチュア精神を指摘しているが、学者にもそれがある。Keats 研究の大家 R. Gittings 氏もそういう学者だ。氏は歴史学から文学に転向したアマチュアの文学研究者といつてよい。最近 Shelley の新しい伝記を書いた。Fuller 女史もそうだ。彼女は家庭の主婦だった。こんな例はいくらでもあ

る。

それにしても多くの B. M. の常連のなかにひとりの老婆の姿がいつもあった。かの女は全くみすぼらしい成りをして、というより、街頭で出会ったらどうしてもコジキとしか見ようのない恰好をしていた。油気のない頭の髪の毛はボサボサで、やせた肩からよれよれのジックのカバンをかけてやってくる。彼女の席は決まっていた。

彼女の読書の対象は、エジプトの象形文字で書かれた古文書だった。いつも机のうえに、象形文字の書物が山と積んであった。そして毎日やって来ては、大きな虫めがねを取り出して、その象形文字を解説しているようであった。彼女がよその人と口をきいているのを見たことがなかった。むろんぼくも一言もことばをかかわなかったから、この老婆がどういう人物なのか、全然見当もつかない。おそらく、われわれの国にはどうてい見あたらない種類の人物であることは確かだ。この国だったら、とっくに精神病院おくりにされているような見かけの女性だ。

さきの I 君にせよ、このコジキの老婆にせよ、英国の社会には、こういう変人やアマチュアが、ほとんど何んの違和感もなしに存在する。英国の文化をささえるしぶとい重厚さは、実はこういうアマチュアとか変人の層の厚さであろう。ちかごろ日本のマスコミは、〈斜陽の英国〉という固定観念でしか、あの国を見ていない。ぼくは決してあの国を讃美するのではないが、かれらの文化を支えているたくましい力に圧倒されないわけにはいかない。かれらの original な才能と文化遺産と、着実に未来にむかってわが道をあゆむ生き方を軽視するもの目はまさにフシ穴というべきであろう。大和資雄先生の名句〈フシ穴の目にのろいあれ〉！